

学びの質の高まりをめざして

## CONTENTS

●発刊にあたって「新学習指導要領を超えて」	1
●学校提案「本年度の研究について」	2・3
●教科部紹介	4・5・6・7
●教育研究発表会案内	8

### 新学習指導要領を超えて

#### —改定作業から見える特徴と授業の改革—

和歌山大学教育学部附属小学校長・松浦善滿



#### <改定作業から見えてきたもの>

そろそろ書店の店頭に「新学習指導要領」の解説書が並ぶ頃だ。「探求」・「活用」・「習得」型の学習活動を取り上げる本も沢山並ぶに違いない。そこで「新学習指導要領」の特徴をその改訂作業から垣間見てみよう。

第一は、「新学習指導要領」は早産であったと言える。というのは「学習指導要領」の審議が、教育基本法の改正、教育再生会議の設置、そして OECD の PISA 調査をきっかけとした「学力低下論争」など、さまざまな教育論議が錯綜するなかで行われたからである。さらに、いじめ自殺事件や少年犯罪、子どもの虐待など、様々なプロブレムが多発していたが、審議会ではこれらの問題状況は報告されても、その深刻さとは裏腹に、子どもの実態を踏まえた論議が十分できずにタイムアップ、見切り発車されたからである。

第二は、「新学習指導要領」は、よく言えば「ゆとり」と「学力」の「調和型」、悪く言えば「雑炊・メタボ型」だと言える。改定作業に加わった安彦忠彦氏（早稲田大学）が「今回の改訂は大枠では特に新しいものではなく、理念や方針においては何も変わらない」（『BERD』No.12）と述べたように、前回の指導要領が掲げた「生きる力」はそのまま踏襲、「総合的な学習の時間」も時間数は減ったが継続というように「理念や方針」は変わっていない。しかし「方策」としては、「学力向上」をめざし、①授業時間数の加算、②「探求」・「活用」・「習得」型の学習活動、「言語と体験」などの推進、③小学5・6年生の英語活動の実施など、いくつもの具体策が示された。

「読解力」や言語の力を重視するなど、個々の提案は大事な視点も含んでいるが、ここ10年間の取り組みの省察や整理が十分でなく、したがって「引き算型」でなく「足し算型」の対応に終始した。結局とともにこれら活動を取り組むと、学校はプールの水が溢れるように各種の取り組みや活動でオーバーフローするであろう。（いやすでに溢れている学校も多い。）当然のことだが、各学校が教育課程を編成するに当たり、教育内容の精選、整理、重点化が重要なポイントになる。

第三は、特徴というよりも、審議経過で取り上げられた注目点がある。一つは、今回の審議で教員の超過勤務の実態が明らかにされ教職員定数の改善が提起されたことである。もう一つは、2004年の国連総会決議、『国連持続可能な開発のための教育の10年』（Education for Sustainable Development）が提案されたことも付加しておきたい。

#### <子どもの願いに応える質の高い授業を>

現代社会は産業社会からポスト産業社会へ、すなわち量から質を求める「高度知識社会」（「知識基盤社会」）へ移行しており、学校教育もこのような状況への対応が求められている。例えば、子どもの潜在的「学習意欲」、「物事や世の中への関心」は私たちの想像する以上に高い。だから、授業で子どものニーズに応えるには、学習内容の質の向上は必至であり、教科書に頼る授業では子どもに学習の楽しさを味わせない。副教本や自作教材を自然や社会と結合した文脈性のある高いレベルで（「学習指導要領」を超えて）組織し、また対話型の学習形態の工夫も必要である。

本校ではここ数年、子どもの実態から出発し①「聞く」を大事にした対話型授業の推進、②各教科、領域の専門的な研究活動の推進、③現職教育の工夫（研究者の協力、参加者全員発表等）、④グループ学習、ICT活用など授業形態の改善、⑤カリキュラム開発、などに多くの教員が取り組んでいる。まだまだ道のりは遠いが、成果も少しづつ見えてきており、子どもも教師もすこぶる元気である。

皆様方に、ぜひご来校いただきたい。

# 提案

## 学びの質の高まりをめざして

研究主任  
志場 俊之



### 1. ヴィジョン

本校の教育目標は、「豊かな情操と知性を身につけ、明るく、美しく、創造性に富む児童を育成する。」です。

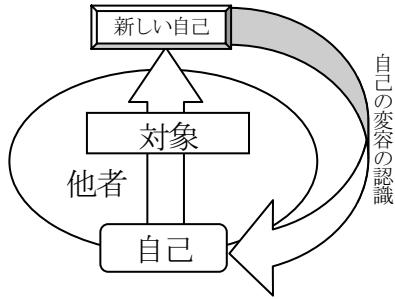
21世紀を生き抜く子どもには、正しい価値判断や主体的・創造的な行動ができる資質や能力をもつことが望まれます。そのためには、対象の本質や価値、真理などの獲得という学びの結果得られるもの以上に、学びの過程が重視されなければなりません。価値ある目標に向かって、自己表現・自己形成を図る努力をし、問い合わせ、自己反省をしながら学んでいる過程で培われる主体的な能力こそ、自分の身の回りにあるさまざまな問題を切り開いていくために必要だからです。

そこで、めざす子ども像としては、「問い合わせ、質の高い学びができる子ども」を考えています。創造的に思考したり、的確に判断したり、豊かに表現したりする主体的な能力は、生きてはたらく力になります。また、問題を明らかにしようとする力にもなり、これから学びの質を高めていくための力にもなります。この主体的な能力を育成することによって「質の高い学びができる子ども」を育てようとしているのです。逆に言えば、より質の高い学びを実現しようとすることが一人一人の主体的な能力を磨く場となるのです。

### 2. 「学び」について

「学び」は、対象と対話し、他者と対話し、自己と対話することで成熟していく三位一体の活動であると考えています。それぞれの対話は、独立したものではなく、ほかの対話も意識しながら進めるものです。とりわけ、学校の中で行われる「学び」は、3つの対話の中でも特に他者との対話が重要になります。

#### 対象・他者・自己との対話の三位一体性



子どもは、自らの意思で目の前にある対象とかかわり、対象のもつ意味を明らかにしていこうとします。他者もまた、対象への興味を持ち対象の持つ意味を探ろうとしています。そこで他者の対象に対する思いや願い・考えに触れ、ものの見方や考え方の多様性を知ります。そこから、似ている点や違う点を明確にしていくのです。自分にはない他者の思いや願い・考えとその根柢とのつながりを吟味し、納得したり、批判的に思考したりして、互いが納得できる部分を増やしていくのです。吟味しているときは、他者の思いや願い・考えと自分の思いや願い・考え、それが対象の認識の仕方として妥当なのかどうか、対象・他者・自己との対話を同時にやっている状態と言えます。

これらのことから、「学び」は、対象・他者・自己との対話のうち一つも欠けることなく、三位一体の対話によってのみ成熟していくと考えているのです。

### 3. 「学びの質の高まり」とは

#### (1) 対象への認識を更新すること

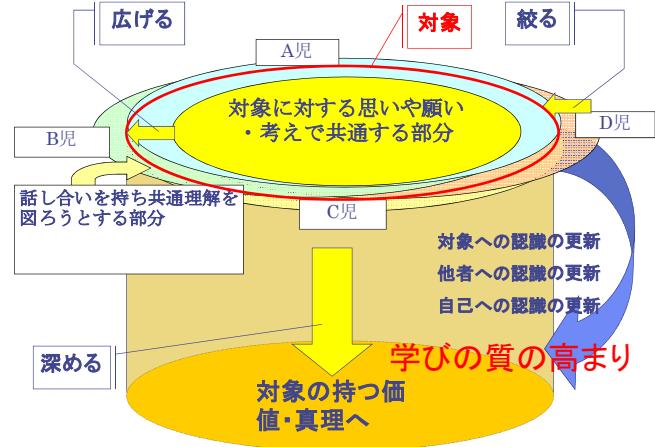
学びは、他者と擦り合わせることで少なくとも自分の考えられる範囲よりは多くの視点からの見方や考え方を得ることができます。しかしそれはまだ、質的に高まるための過程であって、その多様な考えが絞られ、広げられ、整理されていくことで、余計なものがそぎ落とされ、そして新しく必要なものが追加され、質の高い学びが行われるのです。

対象への思いや願い・考えに「絞る」・「広げる」・「整理する」視点が備わった時、子どもは対象への認識を深め、更新していくことができるのです。そのときには、学びは質的な高まりを見せたといえます。

#### (2) 他者への認識を更新すること

他者との対話によって、他者の学びの姿勢に共感し自分に生かせたり、他者の思いや願い・考えに共感し共有できたりしたとき、対象の意味を捉え直すことができると同時に、他者の存在の大切さに気づくようになります。他者を大切にし、謙虚に聞こうとする姿勢、ともに学ぼうとする姿勢が育つと考えます。

他者との協同的な学びから、思いや願い・考えにじかに触れることがあります。今まででは、ただ一つの考え方として受け止めていたものが、「～の考えを持っていた～さんが～と考えるようになった。」といった、ともに学ぶ仲間の学びの変容までも認識していきます。そして、仲間のよさに目を向け、自分に取り入れていくことができるのです。



# 提案

このように、他者への認識を更新することによって、集団としての学びの質が高まるのです。

## (3) 自己への認識を更新すること

また、学んだことの自己認識、他者への自己認識、学んでいる自己への認識という3つの新しい自己を認識していくことができます。

自分は対象をどのように認識できるようになったのか、自分は他者をどのように思うようになったのか、自分がどのように変容したのかという自己への認識を更新していくことは、変容した自己に気づくという意味で、学びの質の高まりには欠かせません。

## 4. 「学びの質の高まり」に向けて

### (1) 「学習文化」を創っていくこと

「学習文化」とは、学び手と教師が、よりよい学びを目指して作り上げてきた成果や様式、内容を指します。「学習文化」を大きく分けると次の4つになります。

1. 学び手と相互に学び合う仲間との温かい人間関係
2. 授業をしているうちに自然に身に付く規律や生まれる雰囲気の上に立った、意図的に創り上げなければならない学びを進めるための規律
3. 規律を守ろうとする学び手の前向きさや学びに向かおうとする意欲や態度
4. 学びによって手に入れた知識や技能

「学習文化」を創っていくことは、学ぶことのできる集団を創り上げることと言ってもいいかもしれません。

### (2) みとりと支援を積極的に行うこと

わたしたちの考えるみとりは、ただ単に、知の部分だけの捉えで子どもを理解するというのではなく、人間的な部分も含めて、その子どもとその子どもから湧き出した思いや願い・考えを合わせて理解しようという考え方になっています。それは、見えている部分だけをみとるのではなく、見えない部分にもかかわっていこうとする能動的な行為です。

また、学びにおけるゆれや変容をしっかりとみとり、記録することを大切にしています。そして、次の時間にはどのような思いや願い・考えを持って学ぶのかをみとることによって、子どもと子どもどうしのかかわりも理解することができると考えています。このような確かなみとりがあつてはじめて効果的な支援が生まれるのです。

個人への支援は、つまずきにどのように対処するか、その子に見合ったものやことをどのように提供するかなど、対象に近づけるための手立てです。集団への支援は、どの子どもとどの子どもの思いや願い・考えを擦り合わせるか、それによってどのような新しい共通な認識が生まれるのかを意識するなど、他者とのかかわりや集団としての高まりを生むための手立てです。

それぞれが意欲を持ち達成感を持てるようにするための個に対応した支援や、思いや願い・考えを、つなぎ、もどす支援があるからこそ、学びに連続性が生まれるのです。そうした支援の繰り返しにより、ひろがりや深まりが生まれ、「学びの質」の高まりへと向かっていくものと考えています。

### (3) プロジェクト型カリキュラムを意識すること

カリキュラム作りでは、どのような子どもに育てたいのかという視点を持ち、子どもにとって望ましい学びが展開されるよう、教材を吟味し選択しながら、子どもの発達段階や目的に応じて配列します。それが子どもの学びの実態に合わないと判断した場合には、教材を選択し直したり、配列し直したりして、子どもの学びに寄り添い、子どもの実態に合うものに作り変えていくような柔軟な対応をしなければなりません。

課題が、その都度子どもの実態や場面ごとの状況を察知した具体的で自然なものであるかどうかを検証しながら、学びの活動に修正を加えていくのです。言い換えれば、プログラム的な計画カリキュラムを、プロジェクト的な実践カリキュラムに構成し直していくことであるといえます。

### (4) グループによる協同的な学びを進めること

わたしたちが考えている学びの形態は、一人学習・ペア学習・グループ学習・一斉学習です。そのときの状況に応じて適切と思われる形態を適用しながら学びを進めています。

また、その場や状況に応じ、同じ考え方の子どもどうしで考えを深めたり、違う考え方を持った少人数で討議したりする学びの形態の適用も考えられます。一人一人が生きるかかわりをめざすために、意図的にグループを組織するなど、その場や状況に適した学びの形態を模索していく柔軟性も必要になってくるでしょう。それが、プロジェクト的な学びであり、すべての子どもの学びを保障することにもつながると考えます。

めざす「学びの質の高まり」について、研究の方向を示しました。本年度教育研究発表会では、これをもとに各教科・領域で研究方法等について提案します。ぜひご参加ください。忌憚のないご意見を頂けることを願っております。

# 教科部☆紹介

## 国語科 「発想力」「論理力」「表現力」を育てる ～言葉にこだわった、対象・他者・自己との対話によって～

着目する言葉、表現する言葉に、こだわりを持って学びを進めていけるような学習文化を大切にしています。

また、対象・他者・自己との3つの「対話力」を磨くことで、発想力・論理力・表現力を養っていきます。その力がより確かな「対話力」を生み、それがまた、より確かに豊かな発想力・論理力・表現力を育てると考えます。とりわけ、自己内対話は、自身の「対話力」との対話であり、その子自身に発想力・論理力・表現力がしっかりと根付く重要な活動であると位置付けています。3人それぞれに、単元構成や授業展開の工夫にも力を入れています。そして、6月13日の国語力向上モデル事業研究会を皮切りに、夏季研修会・本研究会等々、今年度も確かに豊かな国語力を育むべく研究実践に努め、積極的に授業公開していきます。



須佐 宏 西村充司 志場俊之

## 社会科 一人ひとりの学びの充実をめざして

何かいい授業のネタはないかな？



谷口佳都司 片桐 宏

社会科の全体学習につなげるための、ひとり学習の充実を大切にしたいと考えています。社会の問題を自分にかかわりのあるものとして受け止め、多角的に追究していくための学習をすすめていくことが大事だと考えています。

全体学習の中で友達の考えを聞き、自分の思いを出し合う中での“学びの質の高まり”を目指しています。そんな願いを持ちながら、子どもたちと楽しく社会科学習を深めていきたいと思っています。

## 生活科 自立する子ども

### —対象・他者とのよりよいかかわりを築きながら—

今年度の生活科では、身の回りの対象によりそい、自分と対象とのよりよい関係を築き、自分を含めた一人ひとりの存在の大切さを感じながら、思いやりをもった子どもの自立をめざしています。

1年間を通じて、『附属っ子ミュニケーション“<sup>ひなご</sup>和み”大作戦』と名づけたカリキュラムを作成し、よき「日本の生活（衣・食・住）習慣」や「日本の季節感」を取り入れるとともに、マナーやルールを身につけ、好ましい人間関係を構築するコミュニケーション力を育てたいと考えています。



野崎紗代 居澤結美 三上祐佳里

# 教科部☆紹介

## 算数科 子どもがつなげる算数科学習 ～思考の「ずれ」を生かして～

算数科では、算数的活動を取り入れた学習を通し、子どもの思考の「ずれ」を生かしながら子どもが互いに「つなげる」学習をめざして取り組んでいます。算数的活動を通して子どもたちは、式や答え、絵や図など数学的手法を用いて自分の考えを表現します。「よくにているが言い方や書き方が少しちがう。」「説明の絵や図がちがう。」など自分の考えと同じところや異なるところに気づいていきます。自分の考えを表現することで子どもたちの思考に「ずれ」があることに気づきます。一人ひとりの思いや考えを大切にするとともに、互いの考えを交流し、

「ずれ」を意識しあうことで、子どもたちは学習をつなげていくでしょう。そして、共に学ぶ楽しさを味わうことができるでしょう。

夏季公開研修会・教育研究発表会等で交流できればと思います。



土岐哲也 西村文成 北原博男  
梅本優子 宇田智津

## 理科 自然の“文脈”をさぐる子どもを育てる理科学習 —考え方を共有させることで—

理科では、目の前の対象に深くかかわり、関わることから疑問を抱き、疑問を疑問として捉え、その事物・現象の“文脈”をさぐろうとする姿勢を大切にして取り組んでいます。

子どもたちは、“文脈”をさぐる過程で自分の見方・考え方を更新していきます。観察、実験の結果を整理し考察する活動や科学的な言葉や概念で考えたり説明したりする活動を豊富に行います。その中で、子どもたちの考えを表出させ、共有させていきたいです。

自然の“文脈”をさぐることで、より深く、より親密に自然を見つめるようになるとと考えています。そして、自然を大切にし、自然を愛する子どもを育てていきたいです。



中井章博 馬場敦義

## 音楽科 楽しく学ぶ基礎・基本

音楽科では、子どもたちが楽しく自然に質の高い音楽的な力を身に付けるために、各学年の系統的な「音楽づくり」カリキュラムを作成します。

具体的には、

- ①学習カードや楽譜カード等、学習の筋道がわかるPDF資料を作成します。
- ②「音楽づくり」に関わる教材の開発、「プラス・ワン」の工夫を加えて教科書内容の更新をはかります。
- ③教材の選択や学習形態、学習システムの工夫によって楽しみながら学びの質が高まることをめざします。



田辺麻衣子 江田 司

# 教科部☆紹介

## 体育科 新たな発見のある体育の学び

### —子どもの「かわる可能性」に働きかける体育授業—

「休み時間の遊びと体育授業は、どこが違う？」

子どもたちが、スポーツのおもしろさやからだの不思議さについて発見し理解し、上手くなっていく学びをめざしていきます。

できる・できないがはっきりする体育・スポーツの世界では、苦手なことに対して早くからあきらめてしまいがちです。また、「体育はからだでやるから、頭は必要ない」といった先入観も抱きがちです。しかし、運動のコツやルールの意味についてわかることで、恐怖心も取り除かれ、上手くなる見通しも持てるようになります。そのように「わかり・できる」ようになっていくことを、仲間との協同的な学び合いで進めていくことを大切にします。

このように、教師と仲間との働きかけによって、自分が「かわる可能性」に気づいていく体育の学びを追求していきたいと思います。



坂本 桂

北端一喜

## 家庭科 生活力を育む家庭科学習

### ～実感を伴う学びの拡充によって～

家庭科学習では、子どもたちが、より健康的で快適な生活を創ろうとする力（生活力）を、育んでいきたいと考えます。

そのためには、子どもが自分自身を見つめなおす機会をもち、「自分にできること」「自分でやれそうなこと」には、どんどんチャレンジしていき、日々の実践も大切にしていきたいと思います。

また、“ほんまもん”との出会い、科学的な見方等を大切にした、実感を伴う学びを積み重ねていきます。家庭生活を大切にしようとする気持ちを育みながら、大好きな家族のため、そして自分自身のために、よりよい生活者をめざそうとする子どもであってほしいと願っています。



赤井泰子

藤原ゆうこ

## 総合的な学習の時間 学び続ける子どもを育てる

### ～“ほんまもん”体験を通した学びを伝え合う活動を通して～



辻 伸幸

神山求実

藤原ゆうこ

中山昭岳

“ほんまもん”体験とは、「みて、きいて、かいで、さわって、あじわって」という五感を通した体験活動です。そして本年度は、より「人とのかかわり」を強調した活動を行っていこうと考えています。

子どもたち自らが学び続けるためには、学びに対して、子どもたち一人ひとりが切実感をもつことが大切です。

“ほんまもん”体験を通した学びを伝え合う活動によって、問題解決の場面において、目的意識、相手意識を明確にもち、自分ごととして取り組むことができると考えています。

さらに本年度は、各教科等との連携を図ったカリキュラム開発をめざしていきます。

# 教科部☆紹介

## 複式教育部　主体的に学び合う複式教育 ～機能するかかわり合いをめざして～

「異学年」「少人数」という複式学級の特性を生かします。そのためにも、少ない人数の中で共に学び生活する個人と個人のかかわりを重視していきたいと考えます。そして学年と学年、あるいは学級と学級といった、集団と集団のかかわりも大事にしたいと考えます。

そこで、対象・他者・自己との対話を促し、子どもたちの学びをより質の高いものにしていきたいと思います。中でも、「他者との対話」を重視し、司会・記録の育成はもとより、それをとりまくフォロワーのかかわりに着目して研究を進めています。そうすることで、子どもたちのかかわり合いが機能し、主体的に学び合う集団になるとと考えています。これから複式教育のあり方をみなさんと一緒に考えたいと思いますので、一度本校にお越しください。お持ちしております。



北川勝則　辻本和孝　市川哲哉

## 共同研究開発校

教科等	学校名	校長	学校名	校長
国語	和歌山市立 新南小学校	古川 博章 校長	和歌山市立 浜宮小学校	前田 悅雄 校長
社会	和歌山市立 雄湊小学校	谷澤佐規子 校長	和歌山市立 四箇郷北小学校	杉谷 善朗 校長
算数	和歌山市立 本町小学校	山本 篤 校長	紀美野町立 野上小学校	藤本 穎男 校長
理科	和歌山市立 宮北小学校	庄田 光伸 校長	和歌山市立 八幡台小学校	中村 民樹 校長
生活	和歌山市立 広瀬小学校	北畠 嘉之 校長	和歌山市立 有功東小学校	小松 龍三 校長
音楽	和歌山市立 雜賀小学校	有本 宗生 校長	和歌山市立 城北小学校	津田 成章 校長
家庭	和歌山市立 高松小学校	本多加江子 校長	和歌山市立 有功小学校	南 良和 校長
体育	海南市立 北野上小学校	綿野 茂身 校長	海南市立 黒江小学校	小西 利計 校長
総合	和歌山市立 有功東小学校	小松 龍三 校長	広川町立 広小学校	武田 尚幸 校長
複式	田辺市立 長野小学校	南 照男 校長	田辺市立 三里小学校	弓場 博視 校長

## STAFF

校長	松浦 善満	副校長	北原 博男	教頭	梅本 優子
1 A	三上祐佳里	1 B	田辺麻衣子	1 C	西村 充司
2 A	北端 一喜	2 B	居澤 結美	2 C	土岐 哲也
3 A	宇田 智津	3 B	辻 伸幸	3 C	馬場 敦義
4 A	志場 俊之	4 B	谷口佳都司	4 C	中井 章博
5 A	西村 文成	5 B	片桐 宏	5 C	坂本 桂
6 A	山中 昭岳	6 B	藤原ゆうこ	6 C	須佐 宏
1・2 F	北川 勝則	3・4 F	市川 哲哉	5・6 F	辻本 和孝
音楽専科	江田 司	家庭・支援	赤井 泰子（西井 恵美子）	栄養教諭	神山 求実
養護	鳴村 誉子				
講師	野崎 紗代	浦 聰	佐原 ちづよ	森 節子	
	大平 陽子	藤田 裕子	伊澤 亜紗		
	Ernie Wakefield Elliott		Philippa Holland	Thomas Russell Babcock	

### From Editors

8年目の「らいぶ・創りえいたー」、「生き生きと本物を創り出すひと」という意味を込めています。  
ご意見・ご感想をお寄せ下されば幸いです。

和歌山大学教育学部附属小学校  
〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号  
TEL (073) 422-6105  
FAX (073) 436-6470  
URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>  
E-mail fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp

## 第8回 複式授業研究会

主体的に学び合う複式教育  
～機能するかかわり合いをめざして～

日 時 平成20年6月6日(金) 10時40分～16時30分

日 程 10:20 10:40 11:25 11:40 12:25 13:45 15:00 16:30

受付 研究授業I 移動 研究授業II 昼食 研究協議会&交流会(全体会・分科会)

研究授業I

5・6F<理科>：辻本和孝

研究授業II

1・2F<国語>：北川勝則

3・4F<算数>：市川哲哉

全体会①：複式提案 日程について

分科会：研究授業IIについて

国語・算数の2分科会

全体会②：研究授業Iについて(理科の協議会)

複式の実情について(交流会)

### 文部科学省委嘱 国語力向上モデル事業研究会

平成20年 6月 13日 (金) 受付 12:40～

「発想力」「論理力」「表現力」を育てる

～言葉にこだわった、対象・他者・自己との対話を通して～

13:05～13:50 公開授業

1年 C組 国語「おむすびころりん」

指導者：西村 充司

1・2年F組 国語「はなのみち」「スイミー」

指導者：北川 勝則

4年 C組 国語「白いぼうし」

指導者：志場 俊之

14:00～14:45 研究授業

6年 C組 国語「石うすの歌」

指導者：須佐 宏

15:00～17:00 研究協議・講演

講師：岡山大学教育学部 教授 菅原 総 先生

※参加費 無料。(実践資料CDを、800円で販売しています。)

要事前申込：本校ホームページより申込フォームまたはFAXで。6月10日〆切。



今年も夏季教科別研修会を開きます。

7月28日(月)

午前の部(9:30～12:00)

午後の部(13:30～16:00)

7月29日(火)

午前の部(9:30～12:00)

午後の部(13:30～16:00)

今年度も、左記の日程で夏季教科別研修会を開きます。

本校の各教科部の取り組みや考え方を少しでも紹介できればと考えています。たくさんの先生方に来ていただき、ご意見をお聞かせ願えれば幸いです。

なお、夏季教科別研修会での各教科部のテーマや内容については、次号に掲載させていただきます。よろしくお願いします。

**ぜひご参加ください。お待ちしています。**